

藥塵

れにおほきなる太刀ふたつをかけ置きつ、わかき男の裾ひきあげて襷ゆひたるが、たかあしだはきてついがさねのやうなる物、ふたつかさねたる上にのりて、この太刀をひきぬき、さまざまうちふりて、とみに鞘にをさめなどす、すさと見えたる男、これもたすきひきゆひて、これはいまずこし、みじかき刀をぬきて、ぬしとうちあふまねをす、さてかの人のいへるは、かゝる太刀うちのわぎは、たゞもろ人のめをよろこばせめんわぎなり、まことあが家のいとなみは、薬ひさぐわぎにこそあれとて、さゝやかなる紙つゝ、みふたつとて、此ひとつは足とらずといひて、家に傳へたるらうやくなり、あだはら、あくたのやまひ、あるは尻より口よりこくやまひ、舟やまひ、酒やまひ、いづれにもちひても、とみに去るしあり、又こなたなるは、齒をみがく薬なり、このくすりむしかめばをいやし、口のうちのくさきかを除く、はをまろくせんことは、ことにすみやかなりなどいひつゝ、せにひとつを、かの薬もてみかくに、十日の月の雲間をいづるがごと、てりかゝやきて見ゆ、みな人おのがまゝ、もとめつゝ、いぬ、

〔延喜式四十二東西市〕○中 藥塵

〔七十一番歌合下〕六十番 藥うり

御藥、なにか御用候、にんぞん、かんぞう、けいしん候、ぢんも候、

〔通俗編二十一藝術〕藥店 宋讀曲歌飛龍落藥店、骨出只爲汝、又、張籍詩、長安多病無生計、藥鋪醫人亂

索錢

〔雍州府志六土產〕成藥店 俗、藥品未經剗、謂木藥、近世藥店主、擇真偽、精魚法製、而剗之、應需而

賣之、元雖不及醫家之修治、又於草醫甚得便、中華所謂見成藥是也、今所々有之、是稱成藥屋、又近世

市中有稱虎屋、藤屋者、製丸散之藥、而賣之、庶人得其便、

〔春雨樓叢書十三〕貝原篤信